

私のリーダー論

米生まれ日本育ち、違いは力

になります。私は高校卒業後、米国に拠点を移しましたが、今は日米交流を仕事にしているなど、日本との深いつながりは続いています」

「私の知りうる限り最高のリーダーは父で、キャリアの原点でもあります。日本では宗教の話題が適切でない場面が多いことを理解しながらも長年、伝道に努めました。周りと違うことを良しとしない風潮もありますが、幼い頃から違うところが特別な力だと教えてくれました。他人に親切に、敬意をもって接することは、賢く強くあることよりも大切だと折に触れ説いていました」

——小学校から高校まで日本の学校に通いました。困難はありましたか。

「幼い頃はクラスメートの親が自分の青い目の色をみて『外人』と言つのに傷ついていたことがあります。中学生に

なると、人一倍体が大きいことで、いじめられたりけんかをしたりしました」

「中学生の頃、札幌市内の道場で合気道を始めました。先生は技の例を見せる際、身

「特別なものは何も持っていませんが、人と違うからこそ魅力を感じてもらえたケースもありました。日本の文化もよく理解していたことで、違いをうまく生かせるようになったと思っています」



キリスト教宣教師の父に連れられ日本で育った（2015年10月）

相手への敬意、対話の基礎に

——米国の大学への進学を機に日本を離れました。

「リーダーシップ研究の学部を卒業しました。もともと、経営学部やビジネススクールに属する分野で、学部として

は珍しい分野です。その後、博士課程で国際関係も学びました」

「大学では初めて組織のリーダーに選ばれました。全学生組織の会長に立候補し、投票で選ばれたのです。動機は大学に対する怒りでした。学生らが不必要に学費を強いられるしくみがあり、ばかっていると感じていたので、選挙で対抗馬となった人物の考えに賛同できなかったためです」

「『アッシュ政権の政策には同意しないが、相手に敬意を向けながら反対意見を示すことができるのが米国人だ』と話しました。反米思想を持つことと、相手の気持ちを理解しようとすることは相反しません。（米国企業の）リーダーのジーンズをはき、コカ・コーラを飲んで青春を過ごすトルコの学生たちにも伝わったと思います。米国を代表することになったこの経験が米務省からキャリアをスタートすることにつながりました」

ジャパン・ソサエティー理事長 ジョシユア・ウォーカー氏

「The Soil of Leadership」(ブリット・ヤマモト著)
日系アメリカ人のヤマモト氏が日本で有機農業を学びながら過ごし、その知見を自身のリーダーシップ論に応用するまでの体験を描いている。

お薦めの本

——大学でリーダー論を専攻し、今は学生に教えているのでうですね。日米の現状や違いや課題をどうみえていますか。

「日本語の『絆』という言葉

「絆」が結ぶ日本の関係

葉が好きなのですが、これにぴったりの英訳はありません。英語でいうつながりとは、より事務的な取引を指しますが、日本語では精神的な結びつきのニュアンスがあります。懐石料理を2時間共にしてもビジネスの話は一切しない日本文化を、米国人は理解できないことがあります。それでもオンライン会議では決める手に入らない信頼関係がめられるリーダーシップも違ってくるでしょう」

「過去80年間、米国は世界の主要な供給者であり、決定者でした。国としての過ちは何度もありますが、一般的に世界の多くは米国のリーダーシップを望んできたと思います。世界に危機的状況がある今こそリーダーの出番です。しかし、米国の優秀な若者の多くは投資銀行やコンサルティング企業を選び、政府に入りたがりません。民主主義を推進する上で課題だと感じています」



日米交流機関を率いる

Joshua W. Walker 1981年生まれ。宣教師の両親のもと1歳から18歳まで北海道で育ち、地元の学校に通った。大学進学時に渡米し米リッチモンド大で学士号、エール大で修士号、プリンストン大で政治学の博士号を取得。米務省や国防総省を経て、米戦略コンサルティング会社APCOワールドワイドでシニア・バイス・プレジデント。米調査会社ユラシア・グループでも勤め、2019年から現職。米コロンビア大などでリーダーシップについて教える。

「サッカーに例えれば、日本ではゴールを決めることではなく、負けた後に何をするか、逆境にどう対応するかといったリーダーシップが重視

「サッカーに例えれば、日本ではゴールを決めることではなく、負けた後に何をするか、逆境にどう対応するかといったリーダーシップが重視

(川崎なつ美)